

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、「Ⅱ」は出題者による注です。

だれもない線路の脇に荷物を積みあげ、その上に腰をおろした。いったい自分は何をやるうとしているのだろう。つき刺すような寒さと闇の中にひとりっていると、自分の計画だけが勝手にから回りしているような気持ちになってくる。アラスカ北極圏にはじめてカリブー「Ⅱ鹿の一種」の撮影に行ったときも、同じような気持ちがした。それでも、カリブーの季節移動をなんとか見ることができたではないか。きっと今度もなんとかなる。

しばらくすると、ヘッドライトをつけたトラックがこちらに向かってきた。ブッシュパイロット「Ⅱ未開地専門のパイロット」のアーニだ。電話で一度話ただけで、会うのははじめてだった。人の良さそうな感じだ。このような撮影をやる場合、これはとても大切なことなのだ。パイロットとして腕が確かなことはもちろんだが、気が合うかどうか、こちらのやりたいことをどれだけ理解してくれるかが、多くの場合、計画の成否を決めてしまう。ただ飛ぶだけのパイロットはいくらでもいるが、プラスアルファをもっているパイロットはそんなに多くはない。北極圏のパイロット、ブルース・ハドソンのことが頭に浮かぶ。

今晚はアーニーの家に泊めてもらうことにした。トラックに揺られながら、この冬は例年になく雪が多いこと、新しく建てたばかりの家がとても快適なことを話してくれた。この計画に関しての話は何ひとつしなかった。ときどきトラックが雪にはまりそうになる。

深いトウヒ「Ⅱ樹木の一種」の森を抜けてゆくと、彼の新しい大きな丸太小屋があった。

奥さんのキャスイが夕食のしたくをして待っていてくれた。大好きなムース「Ⅱ鹿の一種」のシチューだ。アーニーがこの秋に獲ったとのことだ。

「当分ろくな物は食えないだろうから、腹いっぱい食べていけ」

「ムースの干し肉もたくさんつくったから、それも持っていくといいわ」

夕食に舌つづみをうちながら、話はムースの狩猟に始まり、このごろ大きな議論をまきおこしていたオオカミの間引き「Ⅱ数を減らす

ために殺すこと」問題にまでおよんだ。ムースのポピュレーション「Ⅱ個体数」を維持するために、オオカミの群れを小型飛行機から撃ち殺してゆくアラスカ野生生物局のやろうとしているプロジェクト「Ⅱ新しい計画や行動」のことだ。アラスカじゅうで大きな論争をよび、つい先日、アラスカ大学で公開討論会がおこなわれたばかりだった。

アラスカの人々にとって、狩猟は生活の一部になっている。ムースやカリブーの肉は食生活の中の一角を占めている。野生動物のポピュレーションを維持するためのマネージメント「Ⅱ管理」が必要になってくるゆえん「Ⅱ理由」である。それが州政府の機関であるアラスカ野生生物局の仕事なのだが、予算の大部分はハンター「Ⅱ狩猟者」からのライセンス料「Ⅱ登録許可料」で成り立っている。当然ハンターからの圧力が大きくなってくる。今度のオオカミの問題にしても、ムースのポピュレーションを回復させるために、アラスカ野生生物局は早急な措置「Ⅱ対応策」をとらざるをえなかったようだ。銚先を向けられたのがオオカミだった。アラスカ大学でおこなわれた公開討論会で、だれかが野生生物局の担当者に質問をした。

「ムースの数が減ってきた原因は、本当にオオカミの数が増えたからなのか」

「わからない。とにかくオオカミを間引きすることによって結果をみようとしているのだ」

自然は人間などが介入せず、放っておくほうがいいに決まっている。しかし、それは、そこに人間がいない場合の話だ。ムースの数が減っているのならば、マネージメントの銚先をどうして人間にも向けてこないのだろうか。

ぼくたちはシチューを平らげ、床に寝ころがって熱いコーヒーをすすった。新築の丸太小屋は木の香りでいっぱいだった。荒削りの大きな丸太がむきだしのままで、必要なもの以外は何も見あたらないのに、この家にはなんともいえないぬ暖かさがあった。暖炉にはシラカバの幹が元氣よく燃えていて、家の中は熱すぎるくらいだった。何も考えないで、こんなふうに火を見つめている時間は、なんともいえないものだ。いっそのこと、オーロラの撮影などやめてしまい、このまま帰ってもいいような気持ちになってくる。外の空気を吸おうと思って、むきだしの丸太でできた重いドアを開けると、外は満天の星だった。星が燦々というのは、こういうことをいうのだろう。そういえば、昔、信州の学生村「Ⅱ学生が夏に滞在する村」でこんな星を見たことがあった。けれども、アラスカの夜空の天井のほ

うがずっと低いような気がした。ひどく冷えこんでいるのに、体が熱すぎるため、ちょうどいい気分だった。ぼくはオーロラが出ていないのに少し安心した。山にはいるまで待っていてくれと、何かに向かって祈りたい気持ちだ。

家にはいると、アーニーが地図をひろげている。ぼくたちは計画の詳細について話しはじめた。マッキンレー山南面から流れ出る二つの大きな氷河、トコシトナ氷河とルース氷河周辺がぼくの考えていた候補地だ。アーニーは二つの氷河が流れこむ谷を指さしながら、ここなら降りられるだろうと言った。しかし、そこでは標高が低すぎる。もっと高い山の上にベースキャンプをつくらなければならない。しばらく話し合ったあと、とにかく空から可能性のある場所を見つけようということになった。

「ところで、もし着陸できた場合、何日ぐらいキャンプするつもりなんだ？」

まだ日数のことは話してなかった。なんとなく言いたくなかったのだ。

「一か月したら迎えに来てほしいんだ」

2 アーニーは黙りこんでしまった。予想していたことだ。キャスイも急に心配そうな顔になった。アーニーはせいぜい一週間ぐらいと思っていたらしい。しかし、一週間では出るか出ないかわからないオーロラを待つには短すぎる。やるからには、どんなに大変でも撮って帰りたいのだ。

「ミチオ、真冬のアラスカ山脈にはいる奴なんて今まで聞いたことがない。マイナス五十度まで下がるんだ。それだけでも危険なのに、ひとりで一か月は長すぎる」

これまでぼくがアラスカでやってきたことを説明しながらアーニーを説得しなければならなかった。長い間計画し、準備したことだ。それに百パーセント安全な旅などありはしない。アラスカではどんなことでも、自分自身で経験し、学びとっていかなければならない。結果がどうであれ、それだけがこの土地を理解するための方法だ。

(星野道夫『アラスカ 光と風』より)

問一 — 1 「この計画」とありますが、「ぼく」がこれからしようとしていることについて説明しなさい。

問二 — 2 「アーニーは黙りこんでしまった」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問三 この文章には「ぼく」の自然や動物に対する考え方や接し方がうかがわれます。それらをわかりやすく説明しなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、「Ⅱ」は出題者による注です。

高台に立つ高校に通っていた。

授業中、窓の外へ目を向けると、上空ではなく、すぐそこを鷹が飛んでいるような場所だった。

高台にあったから、眺めは良かった。山肌にぎつしりと建てられた家々と長崎港を覗き込むように眺められた。港には造船所のドックがあり、五島列島や上海へ向かうフェリー乗り場があり、ガスタンクがいくつか並んでいる。ア普段は大きな港なのだが、年に何度

か外国の豪華客船（クイーンエリザベス号など）や、大きな帆船「Ⅱ帆を張った船」が停泊すると、その港は急に小さく見えた。

港を眺める特等席は、図書室があった四階の西側だった。立ち入り禁止だったが、小さなテラスもついていた。

ある時、友達を探して図書室へやって来ると、このテラスにKさんという女の子の姿があった。同じクラスではなかったが何度か話したことはあり、Kさんと同じ中学から来た男友達の話によれば、「Kさん、中学ん時はちよつと苛められとつた」らしかった。

「なんで？」

「だって東京からの転校生で顔も可愛かったら、他の女子たちは歓迎せんやろ。ほんとにいつも一人ぼっちやったなあ」

実際、Kさんの東京弁は高校でも目立っていた。のんびりした長崎弁の中だとリズムが狂うというか、例えば友達に「先生が呼びよつたばい」と言われたら、「なんやろか？」と呑気に職員室へ向かえるのだが、「先生が呼んでたよ」と言われると、「ああ、叱られる」と思ってしまうのだ。

図書室に探していた友達がいなかったもので、なんとなくKさんのいるテラスに出た。何をしているのかと尋ねると、同じテニス部の友達を待っているのだがまだ来ない、と彼女が答える。

「ふーん。これから練習？」

「今日は休み」

なんとなく彼女の隣に立ち、眼下の港を見下ろした。テニス部だったKさんは日に灼けて、ポニーテールがよく似合っていた。Kさんを真似て、同じ髪型にする女の子も多かったはずだ。

「ここから吉田くんち、見える？」

Kさんに聞かれて探してみたが、グラウンドの椰子の木が邪魔をして見えなかった。その後、長崎市内で一番高いビルはどれかという話になった。記憶に間違いがなければ、当時は駅前にあった十四階建ての小さなオフィスビルが一番高かったはずだ。

「ええ？ あれ？」

呆れたようにKさんが高くない高層ビルを見つめる。隣にKさんがいるせいか、見慣れた長崎の町に、まだ見たことのない東京の様子が重なった。自宅を隠す椰子の木のような東京の高層ビルが、小さな長崎の町を隠してしまう。

「Kさんって、中学ん時、楽しかった？」

気がつくとなんな質問をしていた。Kさんに自分の故郷をバカにされたと思ったのかもしれない。Kさんがとつぜん表情を暗くする。予想以上の反応だった。港を見つめたままのKさんの静かな横顔には「知ってるくせに」と書いてある。

「ちゅ、中学の時の友達と今でも会う？」

慌ててしまつて、「ますます墓穴を掘つた。その時だった。」

「つまんない」

Kさんがそう呟いたのだ。

「え？」

「……………中学の時でしょ？ だからつまんなかった」

Kさんはそう言い捨ててテラスを出て行った。テラスに「つまんない」という言葉だけが残る。それが彼女の中学時代に向けられたものなのか、僕自身に向けられたものなのか分からなかった。もちろん初めて耳にする言葉ではなかった。テレビや映画でなら何度と

なく聞いたことのある言葉だった。しかし²この時初めて、「つまんない」という生の東京弁に僕は接したのだと思う。

³中学の頃、Kさんを苛めたという同級生たちの顔が浮かんだ。そこには十四階建てのビルをバカにされたような気がした自分の顔も混じっていた。

高台にあった学校からは長崎港が見下ろせた。イ普段は大きな港なのだが、年に何度か立派な船が停泊すると、港は急に小さく見えた。

(吉田修一「つまんない」より)

問一——1で、「ますます墓穴を掘った」とありますが、どういうことですか。説明しなさい。

問二——2で、「この時初めて、『つまんない』という生の東京弁に僕は接したのだと思う」とありますが、どういうことですか。説明しなさい。

問三——3で、「Kさんを苛めたという同級生たちの顔」に「自分の顔も混じっていた」とありますが、そのとき「僕」が感じたのはどのようなことですか。説明しなさい。

問四——アと——イの文は似ていますが、それぞれの内容には違いがあります。それはどのような違いですか。説明しなさい。なお、説明するときには、「ア」「イ」の記号を用いなさい。

三 次の——①④のカタカナを漢字に直しなさい。一画ずつ、ていねいに書くこと。

約一対一・六を黄金比と呼び、①タテと横がこの比率の長方形は②キンセイがとれているとされる。

③テイエンの池の水面に魚の背びれがうかび上がり、ときどき何かを④イするようにするどくきらめいた。

A 国 語

16

解 答 用 紙

受験番号
氏 名

一

問 一

--	--

問 二

--	--

問 三

--	--	--

二

問 一

--	--

問 二

--	--

問 三

--	--

問 四

--	--	--

三

①

--

②

--

③

--

④

--